平成17年9月6日大水害

あれから10年

教訓は生かせるか…

>2<

森北佳昭氏 基調講演

これからの防災・減災～水害・土砂災害を中心として――

「のべおかの防災・減災を考えるシンポジウム」で基調講演する森北佳昭氏

最悪のコース、速度も遅く

大量の雨を降らせた台風14号

平成16年は台風10個が国内に上陸し、全国に大きな災害をもたらしました。ここ十数年の中で最も水害の大きかった年でした。その1年後の平成17年、台風14号によって宮崎県で大きな水害が発生したわけです。

台風14号は宮崎にとって最悪のコースを取り、スピードが非常に遅いのが特徴でした。南方の海上では自転車並みの時速20㌔、上陸してからは10㌔というスピードで北上し、宮崎県に大量の雨を降らせました。

五ケ瀬川では過去最高の水位を観測し、流域に重大な被害をもたらしました。大淀川でも17ある観測所のうち10カ所で過去最高水位を観測し、浸水家屋4700戸という甚大な被害が発生しました。

翌年の18年7月には、鹿児島県の川内川で大きな水害が発生しました。当時、九州整備局の河川部長だった私にとっては、最も厳しくつらい水害でした。

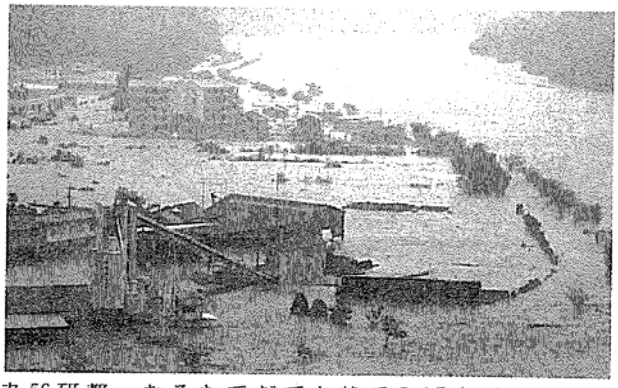
流域に大きな被害が発生し、2300戸が浸水しました。上流の鶴田ダムを満杯状態にして、下流に逃がす水量を少なくしました。大きなダムが薄い壁1枚と思えるほどに大量の洪水をここで受け止めたという状況でした。

ダムがある上流の総雨量は1000㍉に達し、ある一点だけでなく川全体の水位1㍍分の雨が降ったわけです。1秒当たり最大4000立方㍍以上と、想像もできないほどの洪水がダムに流れ込み、最終的に東京ドーム約60個分の7500万立方㍍の洪水を受け止め、洪水調整を行いました。

その結果、下流の水位を最大2・5㍍低下させ、ピークを4時間遅らせました。もしダムがなければ、右岸側は2階家屋の屋根まで浸水していたことになります。

この時、2階の屋根に避難していた人が235人いて、自衛隊、警察、消防で必死の救出活動をしました。祈るような気持ちでしたが、夕方6時ごろまでに全員救助することができました。

もし洪水のピークを4時間遅らせていなかったら、水位を2・5㍍下げていなかったら、2階に避難していた人は厳しい状況になっていたと思います。そして、夜ではなく昼だったのも幸いして、一人の犠牲者も出さずに救助することができました。



五ケ瀬川流域が広範囲にわたって冠水した台風14号水害（平成17年9月6日、北方町川水流）

プロフィル　京都大学大学院工学研究科修了。昭和56年建設省入省。九州地方整備局河川部長、国土交通省水管理・国土保全局治水課長、関東地方整備局長、水管理・国土保全局長などを経て、現在一般財団法人水資源環境センター審議役

防災・減災を考えるシンポジウムから―